

【莊子】さうじ

・昔者、莊周夢に蝴蝶と為る。栩栩然として蝴蝶なり。自ら喻しみ志に適へるかな。周たるを知らざるなり。俄にして覚むれば、則ち遽遽然として周なり。周の夢に蝴蝶と為りしか、蝴蝶の夢に周と為りしか知らず。周と蝴蝶とは則ち必ず分有り。此を之れ物化と謂ふ。

『莊子』齊物論より

・大意

昔、莊周が夢の中で蝶になった。ひらひらと舞う蝶である。楽しさのあまり周であることすら忘れてしまった。ふと目が覚めれば自分は周以外何者でもない。夢の中で周が蝶となったのか、蝶が周となったのかははっきりとしない。周と蝶は別のものであるはずなのに。これが万物の変化というものだ。

『莊子』は『老子』と並び、無為自然を説く道家の根本的著書、あるいはその著者の莊周のことをいいます。莊周は『老子』の思想を継いだ道家の大家で、戦国時代の宋国に属する蒙の人、一説には楚の人です。春秋末戦国初の儒家、孔子の弟子の曾子との混同を避け「ソウシ」を「ソウジ」と濁音に読む習慣があります。

蝶の話のように『莊子』は寓話が面白いですね。寓話の中には「井蛙」「庖丁」「朝三暮四」「渾沌」「座忘」などなど聞いたことのある言葉が登場します。こうした言葉の源に出会うのも『莊子』を読む楽しみのひとつでしょう。寓話や語源のおかげで、私にとって読んでいて眠くならない数少ない漢籍です。

周が蝶となったのか、蝶が周となったのかと問う齊物論の結びの寓話はお茶人に馴染み深いのではないのでしょうか。それは、型物香合番付西前頭三枚目に〈莊子香合〉と呼ばれる菱形の染付香合があるからです。

香合の甲に蝶が描かれているところから上記の寓話に因みこの名で呼ばれています。蝶から莊子を連想するなど面白い発想ですね。

『雑俳・柳多留』に蝶を「さうじ」と記した用例がありますので、この連想は茶の世界に限らず巷でも通用したようです。

さらに夢から他界へと連想は飛躍し、〈莊子香合〉は仏事(追善茶会など)に使われることがあります。これも、面白い作分(創意)といえましょう。

ところがこの作分が手柄(作分が賞賛され普遍的に広まること)になると、仏事以外の茶会では使えないものと思ひ込む方が一部におられるようです。これは手柄の副作用と私は思うのですがいかがでしょうか。

私の知る限りでは〈莊子香合〉のほか〈阿弥陀堂釜〉、掛物一行では「夢」「静寂」など同様の傾向があるようです。

言うまでもないことですが〈阿弥陀堂釜〉を好んだ利休は仏事用として与次郎に造らしたわけで

はありません。

「夢」「静寂」という禅語も本来あの世を意味するわけではないでしょう。
たとえば学生さんが志を「夢」の字に託して卒業記念茶会に掛けてもよいと思うのですが。
香合も「莊子」という銘ならば、仏事専用のレッテルを貼らずに莊子の思想どおり無為自然に幅
広く使ってほしいと思うのです。
茶の湯は約束事の塊ともいえますが、約束事の起こりや意味を吟味すれば頑なに守るべきことと、
柔軟に対処すべきことがあるように思うのです。

<http://www.morita-fumiyasu.com/>

~ Copyright (C) 2011 ~私の書齋~ 森田文康. All Rights Reserved.~